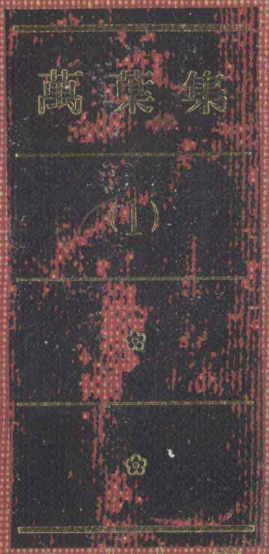
萬葉集
(上)

日本古典文学全集

萬葉集 一

校注・訳
小島憲之
木下正俊
佐竹昭広

小学館・刊

萬葉集 一　　日本古典文学全集 2

昭和46年1月25日　初版発行
昭和51年6月25日　第四版発行

校注・訳者　小島憲之（こじま のりゆき）
木下正俊（きのした まさとし）
佐竹昭広（さたけ あきひろ）

発行者　相賀徹夫
東京都千代田区一ツ橋 2-3-1

印刷所　大日本印刷株式会社
東京都新宿区市谷加賀町 1-12

発行所　株式会社　小学館
東京都千代田区一ツ橋 2-3-1
〔郵便番号〕101〔振替〕東京 8-200
〔電話番号〕編集 東京 03-264-8574
製作 東京 03-230-5333
販売 東京 03-230-5739

© N.Kojima　M.Kinoshita
A.Satake　1971
（著者検印は省略いたしました）

造本には十分注意しておりますが，万一落丁，乱丁などの不良品の場合は，おとりかえいたします。

目次

解説……三
凡例……五一
巻第一……五五
巻第二……一〇七
巻第三……一八七
巻第四……二八九
校訂付記……三九三
補論
万葉集以前……小島憲之……四〇一
竜田山と狭岑島……木下正俊……四一三
人麻呂の反歌一首……佐竹昭広……四一八

付　録

人名一覧……四二七
地名一覧……四四九
系　図……四六一
参考地図……四六五

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

解説

一　巻子本であること

『万葉集』二十巻は、大小とりまぜて二十本の巻子（巻物）から成っていた。繰りひろげた一巻の長さは、短いものでも八メートル、長い巻は二十メートルに達するものもあったと思われる。現代のわれわれにはせいぜい一冊か二冊の本としてしか意識されない『万葉集』が、本来は巻子の形式をとっていたという事実を知っておくことは、ことばの正しい意味において、古典の「ひもとき」方が、古人と今人とで決定的に異なっていたことを改めて確認することであると同時に、また、『万葉集』の成立や編纂過程を考えてゆくうえでも、きわめて重要なことである。

この巻子本という体裁は、今日から見れば、はなはだ不便で、ことに巻尾の近くを見ようと思うときなどは、巻物を全部繰りひろげなければならないという欠陥を持つ。しかし、編纂する者のがわとしては、便利な点があることを認めないわけにはゆかない。それは文字どおり、切り継ぎも切り捨ても、のりとはさみさえあれば自由自在にできたということである。書き損じたら、紙の継ぎ目であろうとなかろうと、切り捨てればよい。新しく加えたいと思ったら割り込ませることも簡単である。資料の料紙にさえたいした不揃いがなければ、貼り継いでゆくだけで編集作業は進められる。げんに巻五の中には、都に住む人々から筑紫の大伴旅人の許に送られてきた書簡をそのまま貼ったのではないかと思われる部分があり、また巻十七以降の、大伴家持と同池主とが贈答した歌文も、家持の手許に残しておいた書簡の控えと池主からの来簡とを交互に貼り継いだと想像できる痕跡もある

(四三左注・二九ページ参照)。もしかすると、巻一の吾の歌以降の部分において、時代の先後が乱れ、同時に詠まれた歌の作者の名を注するのに、一方では「右一首長忌寸奥麻呂」(五七)のように左注とし、一方では「長皇子御歌」(八〇)というふうに題詞とするという不揃いが見られるのも、その、のり・はさみ式編集のなごりかもしれない。思ったよりも手荒な編纂方法が、全体とはいわないまでも、一部に、少なくとも編纂の初期の段階において行なわれただろうということが想像できる。

二　編纂者の問題

『万葉集』は巻物であった。それゆえに一巻一巻がひとつの単元をなしている。時には、歌の左注の中で、この歌はすでに他巻に見えたが、これこれの事情によって重ねてここに載せた、というようなことわり書きを付けた例(三八〇)もあるかたわら、四三と五二、四八と一六〇というふうに、重出した歌が十数組もある事実は、異なる単元のもとにまとめられた結果であろう。もしかりに全二十巻の編纂者が同一人であったとしたら、このようなぶざまなことはこれほどには起こらないだろう。また、用字法のうえから見てもその巻別単元性は相当顕著にあとづけられる(二七ページ)。二十巻全部がみな別人によって編集されたとは考えられないが、少なくとも五、六人、多ければ十数人の人の手が混じって、時を異にして、複雑な手順を経て成ったと思われる。『万葉集』の顕著な性格の一つとして、その多様性が指摘されるが、その多様・不統一の原因のうち、かなりの部分を右のような事情によると考えることは不自然ではないと思う。しかし、それにもかかわらず、全体としては、かなりに統一がとれていることも確かである。その全体調整を行なったのは誰か、つまり編纂作業の首班ないしは最高責任者は誰か、どのような場所でそれは行なわれたか、という編纂成立の問題は、『万葉集』の研究テーマとしてもっとも重要であり、興味あることの一つである。以下、それについて、可能なかぎりの推定を試みてゆこう。

『万葉集』の編纂者は誰かという問題が論議されはじめてから約一千年近い歳月が流れている。平安中期以来、神話のように信じられてきた橘諸兄編纂説に対して、藤原俊成はその不確実性を主張した(『万時』)。しかし、橘諸兄説に未練を覚える学者も多く、鎌倉中期の権律師仙覚のように諸兄・大伴家持二者共撰説を説くものもあった。近世の『万葉集』研究の祖といえる契沖は家持説をとなえた。たしかに、『万葉集』の中には、大伴一族のことについて記事が詳しく、家持自身、『万葉集』四千五百首の約十分の一にあたる量の作品をその中に残し、ことに巻十七以後の四巻に自己の歌日記を収めている。後にもあげるが、天平宝字三(七五九)年の正月一日、『万葉集』の中で年代のもっとも新しい歌を詠んだとき四十二歳であった彼が、そののち六十八歳で世を去るまでのある時期に全二十巻をまとめたということも考えられるし、また、越中守として在任中に、公務のかたわら、巻十六以前の部分を編集したという可能性もなくはない。しかし、その家持がその庇護者的な存在であった橘諸兄――とは限らないが、そのような有力なバック――などの助力なしに単独で作業を進めたと想像することは、さきにあげた反証的事実の存在から考えて不自然であろう。ことに、順序は前後するが、編纂に先立つ過程として、どのようにしてこれほどに大量の作品を収集しえたか、と考えるとき、やはり家持個人の力には限界があったはずだといってよい。

三　成立過程(一)

『万葉集』の中には天皇の作歌から、乞食の詠んだ歌までがはいっている。その間に、皇族あり、高官あり、下級官人あり、兵士あり、僧侶あり、童女あり、遊行女婦ありというふうに、作者の階層という面でも多様性は如実に示されている。時代の幅にしても、真偽のほどはわからないが、十六代仁徳天皇の代から四十七代淳仁天皇の代まで数百年にわたり、地域的にも陸奥国から筑紫の地までにまたがっている。この種々雑多な作品がどのようにして集められたか、誰も答えることはできまい。そのう

ち、天皇を中心とする数多い皇族の作品は比較的容易に入手できたであろう。柿本人麻呂らの天皇讃歌や献呈挽歌、山部赤人や笠金村などの行幸従駕の作なども、それらが公的な場所で詠まれたものであるために残る蓋然率は高かったと思われる。高橋虫麻呂や田辺福麻呂のように藤原宇合や橘諸兄らの政府の高官に身近な人の作品も同じように考えることができる。『人麻呂歌集』とか山上憶良の『類聚歌林』とかいうふうに当時すでに流布していた歌集類は、むろん、資料として活用された。後者のごときは、その分類法や用字法が、それを吸収した巻々において一つの規準とさえなっている。

しかし、遊行女婦であろうと兵士であろうとその名をとどめえたものはよい。当然名はあったはずだが、「或娘子」とか「作者微しきによりて名字を顕はさず」とか書かれた者も、編纂者(広義の)の一部の人にとっては無名歌人ではなかった。ところが、まったく作者の名を記されていない、いわゆる作者未詳の千九百首ばかりの多数の歌——全体量の四割以上を占める——はいったいどのようにして集められたのであろうか。もし、古代中国の采詩官のような役が存在し、各地方に残る歌を採集したとすれば解釈しやすい。三河以遠の東国の民謡を集めた、巻十四の東歌はそのような想像が可能な場合である。また、官人群の酒宴の座興で、いわば即興に詠まれたかずかずの歌は、酒のせいや一座の雰囲気などのために作者自身も己れの歌を忘れることさえあっただろう。歌の作者よりも歌そのもののほうを重要視する立場に立てば、作者名など格別必要ではない。また家持は巻十七以下で、越中に下って来た田辺福麻呂から聞いた古歌とか、平城京に帰任後直属上官であった藤原仲麻呂の邸を公用で訪れた際、同席の老いた下僚が昔耳にしたという歌とかを機会あるごとに書きとめている(だが、これらをその時代の古さの理由で巻一から十六までの諸巻の中に入れなかったことは注意しておいてよい)。このように編纂者(たち)はあらゆる手を尽くして貪欲に歌を収集したために、歌数だけは『古今和歌集』の四倍以上となったが、質的に『万葉集』所収歌のすべてが優秀な作とばかりいえないのも、編纂の態度や方針が必ずしも一貫していなかったことを物語っている。

編纂過程は謎に包まれているが、とにかく集められた歌はおびただしい量にのぼった。これを、あるいは雑歌・相聞・挽歌と

内容別に分けたり、四季別にしたり、年代の前後を考慮したりして、編纂者(たち)は、のり・はさみの作業を続けた。ときに、冬十月に詠んだ黄葉の宴歌がその素材の点から秋雑歌に収められるようなことがあったり(一五八一～一五九一)、

問　答

1926 春山の　馬酔木の花の　悪しからぬ　君にはしゑや　よそるともよし

1927 石上　布留の神杉　神びにし　我やさらさら　恋にあひにける

右の一首、春の歌にあらず。しかれども和へなるを以ての故にここに載す。

問　答

春山の　あしびの花のように　あしくない　あなたのことでならままよ　言い騒がれてもよい

石上　布留の神杉ではないが　年古りた　わたしがいまさら　恋をしてしまったことか

右の一首は春の歌ではない。だが、前の歌の返歌であるところからここに載せたのである。

のあとの歌のように、問答として前の歌と切り離せないため、場所としては適当でないが、便宜上一括したような例もあったりする。その不統一を指摘することは容易だが、編纂者(たち)の苦心の跡は認めてよい。そうして、これら編纂者の中にあってもっとも中心的な役割を果たし、自家の資料を多数提供し、みずから率先してかなりの数の巻々の整理を行なったのが大伴家持であったと思われる。

その作業の行なわれた場所は、ある部分は越中の国府の官舎であったかもしれず、またある部分は五十の坂を越し新興藤原氏の進出に顰蹙しながら鬱々と日を送る京宅であったとも考えることができる。ここで次の推定説を提出することは必ずしも不可能でないように思う。それは、家持の許でほぼ体をなした未完成の『万葉集』が、奈良朝末期あるいは平安のごく初期に、宮廷の図書寮すなわち秘府に収められ、そこで今日見るごとき歌集の最終的な作業が行なわれたろうという想像である。その推定を助けるものは、一つは平安官人の『万葉集』に対して抱いた、かなり根強い万葉尊崇の感情の存在である。

四　成立過程(二)

平安時代の歌人たちは自己の詠んだ歌に対して、絶えず『万葉集』の歌を意識していた。彼らはしばしば『万葉集』という古歌を花の「実」にたとえ、みずからの新作を「花」にたとえた。「花」とは「あや」であり、「あだ」であり、これに対する「実」は「まこと」であり、「まめ」である。『新撰万葉集』の序文の記すところによれば、「古人」すなわち万葉人の表現は、

心緒素を織りて、少しく整はぬ艶を綴る

というところに、その特徴があった。「整はぬ艶」とは未熟な艶、不完全なあやをさす。心が率直であるがゆえに、豊かな艶が少ない、というのである。一方平安人の歌は「浮なる詞、雲のごとくに興り、艶めきたる流、泉のごとくに湧く」(古今集真名序)と自認する。もし、『万葉集』が一介の私撰集にすぎなかったならば、勅撰集である『古今集』の序文に、あれほど随所に『万葉集』が引き合いに出されることもなかったであろうし、

爰に大内記紀友則、御書所の預紀貫之、前の甲斐の少目凡河内躬恒、右衛門の府生壬生忠岑等に詔して、各家の集幷せて古来の旧歌を献らしめて、続万葉集といふ。是におきて、重ねて詔あり、奉る所の歌を部類して、勒めて二十巻とし、名づけて古今和歌集といふ。(真名序)

のごとき、「続万葉集」というようなタイトルは用いられなかったであろう。純然たる勅撰集ではないまでも、平安人は、『万葉集』をほとんど勅撰(官撰)なみに受けとっていたことが推察される。わが国最古の詩集『懐風藻』が平安初期の勅撰三大詩集(『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』)の編纂に際して全然問題にされなかったのも、それが私撰詩集だったためであった。

もう一つ忘れることができないのは目録の問題である。官人の必読書である六朝詞華集『文選』や、さきの『懐風藻』にも目

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

録がついている。また、弘仁期に撰定された『新撰姓氏録』の上表文にも「目をあはせて三十一巻」と見え、藤原佐世撰の『日本国見在書目録』の中にも、逸書「金輪万歳集五十一（一巻目録）」（総集家）とある。これから思えば、『万葉集』にも目録一巻が添えられていたと想像することは可能である。常識的には、目録一巻の中に序文もふくまれているべきである。もし『万葉集』が勅撰であったとすればその可能性はさらに大きい。しかし、現実には序文はもとより、全巻の大目録も残っていない。このことは『万葉集』が勅撰でない証拠の一つともいえるが、勅撰に近い線で考える道もないわけではない。仙覚はその文永本巻二十の奥書において、彼の生きていた鎌倉中期には、目録の有無のうえから見て、

(a) 全巻目録のある本
(b) 巻十五まで目録のある本
(c) まったく目録のない本

の三種類の本があった、と証言している。今日(c)は残っていないが、(b)は元暦本や尼崎本などがこれに当たると思われ、(a)は西本願寺本その他の仙覚本系統がその類である。ただし、底本などの巻十六以降の目録には誤りが多く（巻十五以前に比べて記事が錯綜していて、いかにも目録の作りにくそうな内容が多いことも事実であるが）、その内容を熟知しない者が題詞や左注を理解できないままに作りあげたという印象が強い。ということは、まず、(c)が初稿本、(b)が再稿本で、(a)が精撰本というふうに発達していったことを意味しているようにも思われる。して見ると、家持の手許に残された稿本が(b)であり、(a)が秘府本の『万葉集』だったという推測も可能である。巻十七の三九六一の左注や三九六の前の序などに見える、かなり長大な異文は、(b)が(a)と別れた後に家持がおりふしに加えた筆削のあとであろう。そして(a)の巻十六以降の粗漏な目録は、それが秘府にはいってから間に合わせに官人たちが作らされたと見ることもあながちに無暴な推測ではない。この目録を作らせた人、それは誰かわからないが、その人は秘府の長官の任にあった人であろう。この目録が不十分ながら完備したとき、この時点をもって『万葉集』の成立時期と解したい。

山田孝雄は、東歌の相聞往来歌において武蔵が相模と上総との間に置かれている事実から（宝亀二年以後に武蔵は東山道から東海道に編入された）、『万葉集』の編纂成立が少なくとも宝亀二（七七）年以後でなければならぬと推論した。未完成の『万葉集』が秘府にはいったのはその天平宝字三年から宝亀二年までの十三年間のある時点であったと思われる。

貞観のころ、清和天皇から「万葉集はいつごろ作ったのか」という下問を受けて、文屋有季が「奈良時代の古歌がこれです」とお答えしたことが、『古今集』（九九七）に見える。ただしこの答えは『万葉集』の編纂時期が奈良時代だったことを、なんら裏づけるものではない。『新撰万葉集』の序文に「それ万葉集は古歌の流なり」と述べている記事も成立時期に関する発言ではない。しかし、『古今集』にいたって、その真名序に、

昔、平城天皇侍臣に詔して万葉集を撰ばしめ給ふ。それよりこのかた、時は十代を歴、数は百年に過ぎたり。

とあるのは、あきらかに編纂時期、したがってその成立年代を示す。年表的に見て、「平城天皇」は、平安朝の桓武天皇につづく第五十一代の天皇、平城すなわち奈良の都をしきりに偲んだ平城帝でなくてはならない。真名序の当否は別として、意識的にうそを述べるつもりはなかったはずである。これは当時の官人の『万葉集』撰集に関する通説を代弁するものだったと解してよい。しかし、この平城説はあくまで伝承的なものであって、事実ははなはだ疑わしい。平城天皇説は「平城」への連想から発生した俗説にとどまるような気もする。ただここで『万葉集』が勅命によって編纂されたと受けとられている点は注意を要する。嵯峨弘仁期を中心とする「国風暗黒時代」の三大詩集がいずれも勅撰であり、国史類、『大同類聚方』（医学書）も同様であることから類推しても、平安人が『万葉集』を勅撰と信じていたという必然性はみとめられる。かくて、『古今集』にいう「平城朝」成立説にも疑問符が投げかけられる以上、成立時期の問題は依然として空白のまま今後に持ち越されざるをえない。

五　書名の意味

このあたりで、書名「万葉」の意味を検討しておこう。これについては、種々の説があるが、大別して、

(一)「よろづの言の葉」(多くの歌を収集したもの)

(二)「万代」「万世」(「葉」は「世」「時代」などの意)

の二つに分かれる。(一)は「葉」(木の葉)を詩歌詩文のたとえとみなした説。これは漢籍に見るごとく、「詞林」「叢林」など「林」にたとえた例を傍証とする説であるが――平安初期弘仁期に伝来していた総集『文館詞林』一千巻もその一例――、詩文の「林」から「葉」へと連想の糸が動き、さらに「万葉」へとまで及びうるかどうかについては、かなりの不安がともなう。漢籍においては「万葉」の語は一般に字義のとおり数多の木の葉を意味し、一般に詩歌の意には用いない。これに対して、(二)の万代・万世の意は、漢籍にはなはだ例が多い。もし万葉の書名が漢籍の用例にしたがっているとすれば、やはり万世・万代の意のほうを採るべきではなかろうか。後者は、永遠性永久性を意味し、永遠をかけて祈ることばであって、新しく誕生する歌集に対する祝賀慶福のことばでもある。万世までも伝わってほしいと乞い願う思想は、奈良朝の文献にも随所に指摘できる。『古事記』の序文に見える、「帝紀を撰録し、旧辞を討覈し、偽を削り実を定め、後葉に流へまく欲りす」もその一例である。天平八(七三六)年十一月の、葛城王の橘氏賜姓に関する上表文にも、

ここをもちて、臣葛城等、願はくは橘宿禰の姓を賜はりて、先帝の厚命を戴き、橘氏の殊名を流へ、万歳に窮みなく、千葉に相伝へむことを。

とあり、これに対する詔に、

橘宿禰を賜ひ、千秋万歳相継ぎて窮まること無けむ。

とも見える。さらに天平宝字二(七五八)年の官の表に、女帝孝謙天皇の譲位に際して、女帝の名をたたえて、

上は天休に協ひて、鴻名を万歳に伝へ、下は人望に従ひて、雅称を千秋に揚ぐ。

と述べ、またつづいて僧綱の表に、

徽猷は前古を歴て朽ちず、妙迹は後葉に流れて恒に新し。

と述べる。またその時の詔勅の中に、前帝聖武の名をたたえて、

休名を万代に伝へて、乾坤とともに長く施し、茂実を千秋に揚げて、日月とともに久しく照らしめむとす。

と見えるのも、その名を永久に伝えようとする思想の現われである。右の「万歳」「万代」「千秋」などはいずれも(二)の「万葉」に当たる。「顕宗紀」の「克く四維を固めて、永く万葉に隆りにしたまふ」(出典、梁書武帝紀)の「万葉」もヨロヅヨの意で、すでに『文選』や『文館詞林』などの漢籍にも使用例がある。ことに天平宝字二年八月の表は、『万葉集』の歌の作歌時代のあきらかなもっとも新しい歌の四か月前である。よきものを永遠に伝えようとするこの万葉思想は人名や業績に対してばかり用いられるのではない。延暦十六(七九七)年二月の上表文に、

庶はくは、英を飛ばし茂を騰げ、二儀とともに風を垂れ、善を彰し悪を癉しめ、万葉に伝へて鑒となさむことを。

とあるのも、『続日本紀』の完成を祝うこころである。『続日本紀』を国史の亀鑑として万世にまで伝えようとすることが「万葉に伝へ」るということなのである。これよりさき、宝亀三(七七二)年に成った『歌経標式』の序文に、「もし収採を蒙り、幸ひに当代に伝はらば」云々と見えるが、このように書物の述作に関して伝わることを願うのが当時の風潮である。また、大同元(八〇六)年五月、五百枝王の上表文に、「宗枝を万葉に栄えむ」と述べているのも、子孫繁栄の永久であることを願っての発言であった。歌集の名に「万葉」を冠したのは、『続日本紀』の編纂の場合と同じく万葉に伝えるため、万葉に伝えて鑑とするためであり、編

纂者の祈りの現われであった。この意味からいえば、『万葉集』の末尾を飾る家持の、

新しき　年の始めの　初春の　今日降る雪の　いやしけ吉事（四五一六）

という祝賀の歌は、たんに、豊年の瑞兆とされる大雪に寄せて、その年の幸運を念じた歌であるという以上に、『万葉集』そのものに対する祝言の歌として、重い役割を果たしている。いのち長く、万世に伝わることを願うこころは、『続日本紀』の上表文のごとく、勅撰的な撰集においてなかんずく強烈なものがある。『万葉集』の巻一、二は勅撰的性格の濃い巻であるが、この両巻の成立時に早くも「万葉」の名を付していたとは考えたくない。やはり唐代詩集の書名に見える「総集」としての「集」と――在来は「集」を「別集」の場合に名づける――「万葉」とを合わせて、『万葉集』という名を二十巻全体の総集として付したのは、最終段階においてであろう。しかし万世を願うからとて必ずしもこれが勅撰集であるという証拠にはならない。ただ、この思想が奈良朝から平安朝初期にかけて多くの文献に見え、勅撰的な書名に多いということしか断定できない。もし『万葉集』が秘府においてはじめて命名され、公的に発表されたとするならば、これがその公表にもっともふさわしい命名であるとは断言してよかろう。

六　編纂目的

『万葉集』の編纂目的ははたして何であったか、その誕生の動機は何か。これについては、国史編修の参考に資するためとか、宮廷の大歌採取のためとか、あるいは国を治め身を修めるためとか、いろいろと取り沙汰されている。記紀の述作、風土記類の撰進など、天平以前にすでに散文の編纂物がある以上、当然のこととして韻文の編集も要求されたであろう。特に宮廷を中心として歌は早くから時に応じて収集されていたものと思われる。また心の表現を歌に託していた奈良朝人として、歌を集め、これ

を編纂しようとすることはありうることである。また当時は、六朝の『文選』をはじめとして唐代詩集伝来の時でもあった。中国史書に対する『日本書紀』とまではゆかないにしても、なんとかしてわが国本来の「歌」を集めようと企図するこころがあったとしても、けっして不思議ではない。最初は散文編集に対して韻文をといった漠然とした考えがしだいにふくれあがり、さらに外来の詞華集の類にも刺激されて『万葉集』の編纂にいたった、というのが実情であろう。

右の問題については、なお多少参考になる文献もある。『古今集』の序文はその一つである。その仮名序に、

いにしへの世々のみかど、春の花のあした、秋の月のよごとに、さぶらふ人々をめして、ことにつけつつ、うたをたてまつらしめたまふ。あるは花をそふとて、たよりなきところにまどひ、あるは月をおもふとて、しるべなきやみにたどれることろごころをみたまひて、さかしおろかなりとしろしめしけむ——真名序「古天子毎二良辰美景一、詔下侍臣預二宴筵一者上、献二和歌一。君臣之情、由レ斯可レ見、賢愚之性、於レ是相分。所下以随二民之欲一択中士之才上也」——。

とあるのは、まず宮廷を中心とする歌の誕生を物語り、やがては歌集編纂を暗示する。この君臣和楽から歌の生まれることは『万葉集』の歌の場合も同様であろう。しかし歌によって賢愚を判定するという後半の部分はむしろ紀貫之らの意識であり、『万葉集』には応用できない。宮廷を中心とする君と臣の歌がまず生まれると、官人個人の歌もそれにつれて誕生し、公的な和楽から私的な和楽へと歌はしだいに発展する。このような気運にあれば、時が経過するにつれて、人は懐古的にもなる。仮名序に、「いにしへのことをもわすれじ、ふりにしことをもおこしたまふとて、いまもみそなはし、のちの世にもつたはれとて」と述べるように、過去を回顧するのは人間自然の理である。これは『懐風藻』の撰者官人某が、古人の詩文を偲び、むなしく消え去るのを惜しんで百二十篇の詩を選んだことと、勅撰私撰の差こそあれ同じことになる。『万葉集』もそのいずれの撰——あるいは、その中間的な撰——にしても、過去を回顧し、かつ未来への流伝を願うことには、なんら変わりはないわけである。

しかし、最後の段階においては、やはり書名「万葉」の名義の意味のように、万代への流伝を願うものであり、しかも、それ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com